

論文の内容の要旨

論文題目 小説の自立 ミラン・クンデラという「作者」をめぐって

氏名 篠原 学

本論文は、旧チェコスロヴァキア出身の小説家、ミラン・クンデラ（1929- ）の文学における「小説の自立」という概念について論じたものである。

クンデラが祖国で作家としての活動を開始したのは1950年代のことで、彼はまず詩人として出発し、のちに小説家となった。しかし、小説家としての数年間の活動ののち、いわゆる「プラハの春」に対する弾圧が起き、クンデラは、チェコスロヴァキアの公式の文学史から抹消される。祖国での生活の道を断たれたクンデラは、1975年、フランスに亡命し、それ以降、その作品は、フランスを中心に、おもに冷戦構造における「西側」諸国で受容されてきた。

以上のような来歴をもつことから、クンデラは、その「西側」諸国での受容の初期においては、しばしば政治的な作家、あるいは反体制的な作家というイメージを付与された。そうしたイメージは、クンデラにとって、自分の小説の理解の妨げになるものであった。この状況を改善するために、クンデラは、新しく獲得したフランスの読者に向けて、自分の文学観を、エッセイをつうじて発信していくことになる。その文学観の要となっているのが「小説の自立」という概念である。

小説の自立とは、小説が、現実の政治的・社会的なコンテクストに依存しない、小説に固有の価値をもっている、という概念である。たとえ、小説のなかに、現実の政治的な事象や、歴史的な事実が書き込まれているとしても、それは、小説が、こうした事象や事実のうちに還元

されうることを意味しているわけではない。むしろ、小説において重要なのは、人間にかんする、より普遍的な観察をおこなっている部分である。これが、クンデラの考えである。

こうした考え方は、概念としては新しいものではなく、アリストテレスが『詩学』において詩作と歴史を対比して以降、受け継がれてきたものである。だが、クンデラがこの考えを述べるのは、みずからの作品の受容を方向づけるためであり、その文脈においては、「小説の自立」は、「小説とはこのようなものである」という概念であることを超えて、「小説はこのようなものであるべきだ」あるいは「小説はこのように読まれるべきだ」という理念になっている。こうした理念化において、作品受容の場において作者の主張が決定力をもちはじめるとき、自立しているはずの小説は、規範的な読みを与えようとする作者に従属したものとなる。

本論文は、小説の自立のこのようなジレンマに焦点をあてて、そこから立ち現れる、クンデラの多面的な作者像を記述することを、目的としている。

本論文は、序、本論（第一～六章）、結（むすび）からなる。

序においては、クンデラについての先行研究を概観し、上述した本論文の目的が独自性をもつことを述べた。これまで、クンデラの小説は、その美学的な側面に光をあてて読まれることが多かった。しかし、作品の美学的な側面は、クンデラにおいては、政治的・社会的な側面への言及を非本質的なものと見なす作者によって、とくに重要性を与えられているものである。そのため、美学的な側面に集中する議論が、作者の設定した視角を無自覚に前提としていることを、ここでは批判的に述べた。

第一章では、クンデラのエッセイにおいて、「小説の自立」という概念がどのようなものとして提示されているのか、また、この概念が、クンデラ自身の小説の創作において、どのような原理としてはたっているのかを明らかにした。小説が自立している、ということは、政治的・社会的なコンテクストが、小説から切断されている事態を指している。それは、これらのコンテクストを束ねる現実の歴史が、小説の外部に放逐されている、ということでもある。こうした内部と外部の切り分けにおいて、小説のなかの歴史は、一種の時事性として、読みの場において周縁に置かれる。だが、クンデラの小説においては、作者が周縁に置いたはずの歴史が、しばしば強いリアリティをもって読者の眼前に迫ってくる。クンデラの小説が、クンデラの小説観を反映していることはまちがいないのだが、同時に、そこには、この小説観に反発するような作用も生じている。そこに、クンデラが撓めようとしている歴史の強い力が看取された。

クンデラにおいて、歴史は、作者が作品から排除しようとしても排除できない力として現れている。それゆえ、クンデラの小説においては、歴史に対して、小説はどのような態度で、どのように接すればよいか、ということが、メタ的に主題として扱われる。クンデラの小説、および戯曲のこの主題を、ディドロの運命論や、ニーチェにおける永劫回帰の思想との関連のなかで論じたのが、第二章である。すでに起ったこととしての過去は変更できない。これが、ク

ンデラの小説のなかで、歴史が重々しいものとなる理由なのだが、クンデラは、こうした書き換えのきかない、運命的なものとしての過去への態度を、ディドロやニーチェを手本として模索している。

ところが、この模索の過程で明らかになるのは、小説という芸術そのものが、出来事の因果性にしばられたものとして、書き換えが不可能な歴史の相貌を帯びてしまう、ということである。しかも、そこに因果性をもたらしているのは、作品を統一的なものとして完成させようとする作者である。作者は、いっぽうでは歴史の力から自由になることを望みながら、その作品である小説を、歴史に似たものとして提示してしまう。この矛盾は、クンデラにおける作者概念の絡みあいをそのまま映し出している。

第三章では、この絡みあいをときほぐすために、クンデラのテキストは、ロラン・バルトの傍らで読まれる。「作者の死」ということを述べ、文学研究の場における作者の地位を相対化してみせたバルトは、先行研究では、クンデラの仮想敵のように位置づけられてきた。しかし、クンデラという作者は、つねに作品に現前しながら、そのいっぽうでは、バルトが述べた意味で「死」に至ることを望んでもいる。バルトを経由して見ることで、「死」と「再生」のあいだを揺れ動く作者の姿を、クンデラのテキストから浮かび上がらせること。それを目的として、第三章の議論は展開された。

クンデラにおいて、作者は、こうした揺らぎを抱えた存在である。その揺らぎの根底にあるのは、作者は、みずからが望むと望まざるとにかかわらず、テキストの意味作用をあらかじめ覆ってしまう主観性としてある、ということである。第四章では、主観性としての作者というこの問題を、技術という観点から捉えなおす視点が提示される。作者は、作品において技術を行使する主体であり、その限りで、かならず、作品を計測可能性のもとに置いてしまう。だがそれは、テキストにおいて、作者が主観性として回帰することを免れない、ということなのだ。

テキストにおいて主観性としてあることから、作者は逃れることができない。だが、そのようなあり方を緩め、弱めることはできる。そのための技術として「変奏」を意味づけることが、第四章の主眼である。「変奏」は、起源としての作者のありようを、他なるものへ向かって開く技術として意味づけられる。ここでは、作者はテキストにたえまなく回帰しつつ、その反復のなかで、徐々にテキストの意味作用を他者に譲り渡す存在として描き出される。

第五章では、こうした複雑な動きを見せる作者が、読者に対しては、テキストの読みを方向づける一種の権威として立ちのぼることに着目し、クンデラの小説を取り巻く言説空間のなかで、作者が占めている特権的な位置を確認する議論をおこなった。クンデラは、その小説観を語ることで、テキストの規範的な読みを提示する。そうした介入の身振りは、これまで、クンデラの作品の受容の現場に、さまざまな齟齬を引き起してきた。こうした齟齬に応じるようにして、クンデラは、文学作品のあるべき読み方について、ますます多くを語るようになる。

その結果、テキストを取り巻く言説空間に、作者の意に沿う読み方をする読者だけが迎え入れられる、読むことをめぐる排他的な共同体が立ち上がる。

この共同体を、クンデラは「ヨーロッパ」の名で呼んでいる。そこでは、読者は自由にテキストを読む権利、テキストについて、自分が語りたいことを語る権利を否定される。クンデラにおける「ヨーロッパ」は、なぜ、このような、権利を否定する共同体としてあるのか。この問題を、ポール・ヴァレリーのヨーロッパ論との比較や、公的領域と私的領域の関係をめぐるハンナ・アレントの議論への参照をつうじて明らかにしたのが、第六章である。

クンデラにおける「ヨーロッパ」は、小説の精神を具現化したような理念的な場所としてある。それは、現実のヨーロッパを批判しながら、その批判を養分として立ち上がる場所なのだが、そのことは、この空間を統括する存在であるクンデラが、現実のヨーロッパが経験してきた歴史に深く囚われていることを、逆説的に物語っている。その事態のうちに、伝記的な作者の回帰をふたたび見出して、第六章の議論は閉じられる。

結では、本論の議論の総括として、本論文が、クンデラの小説に対する、どのような新しいアプローチを提示しているかを述べた。クンデラの小説は平明だが、その平明さは、クンデラが作者として抱えている葛藤を濾過して、テキストの表面に現れた平明さにほかならない。読者はその表面に留まることも、奥へ進むこともできる。そのどちらを選んでも、読者はクンデラの葛藤に、それぞれの仕方で触れているのである。